

令和 6 年度中学校武道授業(空手道)指導法研究事業



令和 6 年度中学校武道授業(空手道)指導法研究事業〔主催=日本武道館・全日本空手道連盟・日本武道協議会、協力=富山大学教育学部附属特別支援学校、後援=スポーツ庁〕は、11月20日(水)、富山大学教育学部附属特別支援学校において、研究者 8 名、研究協力者 2 名、連盟事務局 1 名の計 11 名が出席して実施した。

開講式では、高橋昇公益財団法人全日本空手道連盟事務局長と沢登英徳公益財団法人日本武道館振興課主事兼課長補佐が主催者挨拶を述べ、学校を代表して野崎美保副校長と研究者を代表して小山正辰研究者がそれぞれ挨拶を述べた。

開講式後、体育館に移動し、研究協議(1)「特別支援学校における空手道授業指導法について」として太田熊野研究協力者の指揮で、中学部の生徒 16 名を対象に、体験授業を行った。準備運動の後、太田研究協力者から形と組手の説明があり、実際に高岡第一高等学校空手道部の 3 名が「五十四歩小」の形演武と分解を披露した。



高岡第一高等学校空手道部による形演武披露

演武を見た生徒の一人から、その迫力に「怖かった」という発言があり、太田研究協力者から、空手道は喧嘩をするための手段でなく、身を守るための手段であることを説明した。



太田研究協力者による体験授業

次に、生徒たちは右手に赤色の手袋、左手に青色の手袋を着用し、指揮者の「赤が上、青が下」などの号令に合わせて、突き方や受け方を練習した。

最後に、練習の成果として音楽に合わせて「パプリカラテ」を全員で行い、授業が終了した。

授業後、授業視察者 2 名と教員 1 名が加わり、振り返りを行った。研究者から「演武の際に耳をふさいでいる生徒がいたので、配慮が必要である」、「本時の流れを最初に可視化して示しても良かったのではないか」、「全員で行った後、生徒一人でやらせても良かったのではないか」、「生徒同士で見せ合う場面があっても良かったのではないか」などの意見が挙がった。

研究協議(2)では、太田研究協力者と井下佳織研究協力者から「特別支援学校における空手道授業の実践例について」報告があり、研究協議(3)では、「特別支援学校における課題」について 2 班に分かれて話し合い、自己肯定感を高めるための取り組みや空手道を通じて何を学ばせるのかなどといった検討テーマについて発表があった。

最後に各研究者から報告・発表があり、特別支援学校における空手道授業を通じて、生徒たちの自立支援にどのようにつなげていくのかという点について、引き続き検討を重ねていくことを確認して閉会した。